

技術は芸術，ゆっくりと

今日の科学技術の発展は目覚ましい。2，3年離れているだけで，自分の専門分野の姿が全く変わってしまっているといった状況である。ところが，そのような科学技術も具体的な産業応用ということになると多くの課題を含み，容易に製品に結びつかない。たとえ製品ができたとしても，それが広く社会に受け入れられ，誰もが自由に使い，また楽しむというところまで行くためには長年月の改良が必要となる。そこには芸術的センスさえ要求されるようになってきている。



そもそもアート（art）という語はギリシャ語のテクネ（技術）と同じ意味のラテン語であった。つまり高い品質の物造り，職人芸がアートであり，これが芸術作品に繋がっていったのである。何百年か前に日常的に使われていたもので，ほんとうに使いやすい良いものは多くあり，今日民芸といった形で高く評価されていたりする。こういったものは長い年月をかけて改良を重ね，本当に使いやすく親しみがもて，また人間の美意識をも満足させるものとなっている。

現代の技術やそれに基づく製品もこのように多くの人が使うことによって改良され，使いやすい親しみやすいものにまで高められてゆく必要がある。それにしてもあまりにも変化の方が早すぎ，そういった熟成のための時間を確保することが難しいのが現代である。ゆっくりとした熟成のときを必要とするワインでさえ，熟成を早める研究がなされているという。技術を芸術に持ってゆく研究をしなければなるまい。

しかし，人間はなぜこのように急ぐのだろうか。急いで何処へ行こうとしているのだろうか。

理事長 尾 真

（独立行政法人 情報通信研究機構・理事長，前京都大学・総長）